

スマホ社会と子どもの未来 ～技術革新は人類を幸せにするのか？～

第10回「子どもとメディア全国フォーラム」開催にあたって

近年、情報通信分野で進行する技術革新は私たちの生活を大きく変えました。ネット社会と呼ばれる状況が進む中で、買い物や決済などの経済活動は大きく様変わりし、国政選挙などの情報戦略も見直しが迫られています。しかし、一方で今、その変化が子どもたちの「人間としての育ち」に悪影響を及ぼすのではないかと、という懸念が広がり始めています。

スマホ・タブレットの普及によって多様な情報へのアクセスが、乳幼児でもどんな場所でもできるようになり、電子メディア接触の早期化、長時間化が一段と進みました。このことは、子どもたちの人間としての基本的な発達にとって不可欠な様々な現実体験の減少をもたらしています。その結果、言葉やコミュニケーション能力の発達の遅れや歪みにつながったり、子どもロコモなどの身体機能の育ちの歪みにつながったりしています。さらにメディア機器との早期接触、長時間接触は、脳機能（学力）の異変や視覚機能の異常につながることも指摘されています。

WHO（世界保健機関）は2019年5月「ゲーム障害（Gaming disorder）」を精神疾患として正式に認定しました。スマホやゲーム機によってもたらされるゲーム中毒は、依存症という病気の問題にとどまらず、子どもにとってはその育ち全体を歪ませ「人間」として成長発達する権利そのものが侵されることだと言えるでしょう。

1994年にわが国も批准した「子どもの権利条約」では、子どもの育ち（第6条）と子どもの学び（第28条）を保障するために最善の努力をすることが締約国の大人達の責務だと謳われています。世界には高校生になるまでスマホを持つことを禁止している国や乳幼児がスマホやタブレットの画面を見る機会を極力避けるよう呼びかけている国もあります。しかし、わが国では、こうした対策や注意喚起は全く行われていません。

今回のフォーラムでは、各界の専門家をお招きして、人間にとって、子どもにとって、情報通信機器の技術革新はどのような影響を及ぼしているのかを整理すると共に、こうした社会で子どもたちの育ちをより豊かにするために、大人達は何をすればよいのかを考え、話し合う場になればと願っています。

NPO 法人子どもとメディア 代表理事 清川 輝基

ICTの進歩は急速なものがあり、現代の生活には欠く事のできない現状があります。様々な場面でICTをうまく利用することで生活が便利になっておりますが、健康への影響を考えると、節度を保ってICTを利用することが重要です。

世界保健機関は、ネットゲームなどのし過ぎで日常生活に支障をきたす症状について、2019年5月、病気の世界的な統一基準である最新版の国際疾病分類に、「Gaming disorder」（ゲーム障害）として新たに盛り込みました。今後、我が国では厚生労働省が今後の対策を検討することになります。ゲーム障害が国際疾病分類に入ったことで、ネットやSNSが広く普及する中、負の側面であるネット依存の実態把握や対策が進んでいくことが期待されます。

本フォーラムにおいて、診療の現場からネット依存などで健康を害する子どもの現状、メディア漬けの生活が子どもにどのような影響を及ぼしているのか、学校での現状とその対策について、といった課題の共有や提案がされることを期待しております。日本医師会でもネット依存の問題は重要と考え、継続的に文部科学省に対し予算・政策要望を行っておりますが、今後とも関係者と連携して「子どもとメディア」の問題を提起していきたいと考えております。

公益社団法人 日本医師会 会長 横倉 義武

2004年に日本小児科医会は、「子どもとメディアの問題に関する提言」を発表しました。それ以後、メディア接触が子どもの心身の健康に及ぼす悪影響について啓発してきました。保護者への啓発資料「スマホに子守りをさせないで」は世間の大きな反響を呼び、スマホ利用の是非を含め議論されてきています。メディア接触による健康被害は多岐にわたるため、子どもに関係する各種団体（眼科、耳鼻咽喉科、整形外科、精神科など）と懇話会を設置し、それぞれの職域で問題になっている事象について意見交換しております。また、子どもに係る医療関係者にこの問題を知っていただくため、日本医師会と共同で日本医師会会員10万人に、保護者への呼びかけ用「遊びは子どもの主食です」、児童生徒への呼びかけ用「スマホの時間私は何を失うか」のポスターを配布しました。

近年日本のインターネット依存症の若者が急増して、この問題の解決には大変な労力を要します。世界保健機関（WHO）が「ゲーム障害」を新たな疾病として正式に認定しましたので、これから病気としての理解がすすみ、治療についても進歩すると思われます。フォーラムでは専門家が多方面からメディア問題について講演していただくことになっており、スマホ社会への警鐘になることを期待しております。

公益社団法人日本小児科医会 会長 神川 晃

シンポジウム

スマホ社会と子どもの未来～技術革新は人類を幸せにするのか？～

14:45～16:55

基調提案 子どもの“からだと心”のいま

野井 真吾 子どものからだと心連絡会議議長・日本体育大学体育学部健康学科教授

「すぐ「疲れた」という」「背中ぐにゃ」「保育・授業中、じっとしていない」「朝起きられない」「夜眠れない」等々…。子どもの“からだと心”が「ちょっと気になる」「どこかおかしい」といわれて随分長い年月が経過してしまいました。これらは、病気（disease）や障がい（disability）とはいえないものの、さりとて健康ともいえない事象で、“おかしさ（disorder）”としか表現できないようなものがほとんどです。そのため、「子どものからだと心・連絡会議」では“健康 or 病気・障がい…?”といった二者択一の議論ではなく、“健康”と“病気・障がい”の間の事象にも注目してこれらの問題の実態とそれを解決するための議論を展開してきました。当日は、その一端を紹介できればと思います



討論

中村 桂子 生命誌研究者・JT生命誌研究館館長・理学博士
野井 真吾 日本体育大学体育学部健康学科教授

富田 香
道永 麻里

小児眼科専門医
日本医師会常任理事

コーディネーター

内海 裕美 日本小児科医会 業務執行理事
清川 輝基 子どもとメディア代表理事

開会挨拶

10:00～10:20

横倉 義武（日本医師会会長）・神川 晃（日本小児科医会会長）・清川 輝基（子どもとメディア代表理事）

基調講演・質疑応答

10:20～11:35

スマホが児童・生徒の脳発達を阻害する

川島 隆太 東北大学教授・脳科学

座長 山田 眞理子（子どもとメディア代表理事）
佐藤 和夫（子どもとメディア代表理事）

仙台市立小・中・高校に通っている約7万人超の児童・生徒全員の各教科の学力調査結果と生活習慣アンケート調査結果を、8年間にわたり連結可能匿名化手法を用いて追跡調査してきた。その結果、横断的調査でスマホ使用時間が平日で1時間を超える児童・生徒では、学力が使用時間と相関して低下すること、縦断（追跡）調査で学力の低下の原因はスマホ使用であることを明らかにしてきた。スマホ使用による学力低下の原因を究明するため、健康な児童・生徒224名の3年間の脳発達を、MRIを用いて評価したところ、スマホ・タブレット等の使用頻度の高い小児の大脳皮質、および白質の広範な領域に発達遅延が生じていることを明らかにした。



基調報告・質疑応答

11:40～12:30

WHO「ゲーム障害」認定までの経過とこれからの課題

樋口 進 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター院長・臨床精神医学

座長 山田 眞理子（子どもとメディア代表理事）
佐藤 和夫（子どもとメディア代表理事）

2019年5月に行われた世界保健総会で、ゲーム障害が正式にICD-11の仲間入りを果たした。しかし、この収載プロセスは順風満帆ではなかった。当初のICD-11草稿には、ネット依存・ゲーム障害は入っていなかった。我々はWHOと緊密に協力し、2014年の東京でのWHO会議から5年かけて、正式収載にこぎつけた。eスポーツ振興などを含めゲーム業界は益々肥大化している。負の側面であるゲーム障害および関連問題の予防・対策が、今強く求められている。当面以下のような対策が必要である。1) ゲーム障害および関連問題の実態把握、2) 包括的予防教育の実施、3) 相談体制の確立、4) 医療体制の充実、5) ネットへのアクセス制限等、6) 研究推進。



昼休憩

12:30～13:30

特別講演

13:30～14:30

人間は生きものであるという原点 ～生命誌とスマホ社会～

中村 桂子 生命誌研究者・JT生命誌研究館館長

「人間は生きものであり、自然の一部である」というあたりまえのことを基本に「どう生きるか」を考えています。生命誌（Biohistory）は私たち人間が38億年前に誕生したとされる祖先細胞に始まって、多様化してきた生きものたちの中にいるヒトという存在であることを教えてください。38億年の歴史には「続いていく知恵」が入っています。そこに学ぶ「生命論的世界観」で社会を組み立てていこうというのが生命誌からの提案です。そこでは身体や心に意味を見出します。一方、「スマホ社会」は「機械論的世界観」で成り立っており、そこでの価値は一律の進歩であり利便性を求め、継続性は入っていません。身体性や心を意識した豊かな社会を続けていくにはどうしたらよいかを考えたいと思います。



シンポジウム

スマホ社会と子どもの未来～技術革新は人類を幸せにするのか？～

14:45～16:55

基調提案 子どもの“からだと心”のいま

野井 真吾 子どものからだと心連絡会議議長・日本体育大学体育学部健康学科教授

「すぐ「疲れた」という」「背中ぐにゃ」「保育・授業中、じっとしていない」「朝起きられない」「夜眠れない」等々…。子どもの“からだと心”が「ちょっと気になる」「どこかおかしい」といわれて随分長い年月が経過してしまいました。これらは、病気（disease）や障がい（disability）とはいえないものの、さりとて健康ともいえない事象で、“おかしさ（disorder）”としか表現できないようなものがほとんどです。そのため、「子どものからだと心・連絡会議」では“健康 or 病気・障がい…?”といった二者択一の議論ではなく、“健康”と“病気・障がい”の間の事象にも注目してこれらの問題の実態とそれを解決するための議論を展開してきました。当日は、その一端を紹介できればと思います



討論

中村 桂子 生命誌研究者・JT生命誌研究館館長・理学博士
野井 真吾 日本体育大学体育学部健康学科教授

富田 香
道永 麻里

小児眼科専門医
日本医師会常任理事

コーディネーター

内海 裕美 日本小児科医会 業務執行理事
清川 輝基 子どもとメディア代表理事

